The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	歴史物語の思想
Author(s)	加納, 重文
Citation	大阪大学, 1994, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/38487
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【 9 】

氏　　名	加納重文（かのうしげふみ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　11037　号
学位授与年月日	平成6年1月5日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**歴史物語の思想**
論文審査委員	（主査） 助教授　伊井　春樹 （副査） 教　授　信多　純一　　教　授　前田　富祺

論文内容の要旨

本論文は，平安中期から鎌倉期にかけて成立した歴史物語を対象とし，各作品の本質と性格につき，書かれた思想とその立場に視点をおきながら体系的に論じた内容である。全体は，まず序編で歴史物語の概説と性格を述べ，第Ⅰ編『栄花物語』，第Ⅱ編『大鏡』，第Ⅲ編『今鏡』，第Ⅳ編『水鏡』，第Ⅴ編『増鏡』といった構成で，それぞれについて詳細に考察していく。さらに巻末には，付編として作品ごとの「研究参考文献目録」2600タイトルほどを収集し，400字詰原稿用紙にしておよそ1600枚ほどの，695ページからなる大著である。

序編では，個々の作品の概説と，歴史物語における性格を考察する。『源氏物語』の影響を強く受けて成立した『栄花物語』は，その詳細な内容が史実の微細で正確な記述に結びつくのではなく，事柄をめぐるさまざまな場面や心情の詳細さを描くところに特色がある。道長の栄花を別の立場から把握したのが『大鏡』で，ここでは事件の原因を求め，事柄の展開とそれに関わった人間の行動に注視していく。それに対して『栄花物語』は，事件に人間がどのように関わり，関わらされたのかが問題であったため，そこで引き起こされた人間感情のこもごもを見守る態度となる。『大鏡』の姿勢を継承しながら，また独自の立場を主張していったのが『今鏡』で，摂関政治における道長のような人物がいなくなっただけに，画一的ではなく，院政期における個々の人間の生き方が語られていく。

第Ⅰ編の『栄花物語』は九章からなり，作品としての性格，正編の思想，記述の誤り，作者の問題，典拠とした資料，続編の構成などによって編成される。正編三十帖の記事内容の多さは，薨去関係・仏事・結婚・誕生・官位の順で，歴史物語でありながら人事的関心が強いのは女性のために書かれた作品の性格による。薨去関係記事にしても，薨去そのものを描くよりも，大半はその薨去にいたる近親者の悲しみと気遣い，薨去後の悲しみの葬送や故人への追憶，周忌の法事が中心となる。これは，他の結婚や誕生の記事でも同じである。また，道長自身の栄花そのものを描くことは少ないが，これは道長をとりまくさまざまなできごとをともに喜び，悲しむのが道長栄花の世界の叙述であるとする方法による（第一章）。

正編だけで400箇所近い史実の誤りが存するが，直接史料によらずして，見聞の記憶によってかなり自由に叙述した執筆態度による。これは，男性官僚による日記や記録と記載方法を異にしており，女房日記の存在が想定できるの

ではないか（第三章）。『源氏物語』は事柄の発生や経過・展開よりも，それによって生じる人間のさまざまな心情を描くことに主眼があり，物語にこそ歴史的な真実があるとするのが蛍巻の物語論である。『栄花物語』はそれに大きく影響を受け，史実的には厳密さを欠きながら，むしろ情趣的に偏した記述態度となっており，これは歴史というよりも物語認識に負うものといわざるを得ない（第四章）。作者については，道長室倫子の女房であった赤染衛門が推測されているが，作品に描かれた人物の特徴から，むしろ妍子周辺の女房ではないかと想定する。道長周辺の人物としては妍子の描写に特色があり，とりわけ細部にまで筆が及んでいるのは，内部から見ていたことに要因がある。妍子の登場する場面では「見る」「聞く」のことばが多用され，関係のない場面になると伝聞の記述となる。かつて，妍子女房日記の存在が言及されたが，むしろ妍子女房が作者だったからではないか（第五章）。また，乳母の描写が多く，しかも無名の乳母に対してまでも同情的な態度を示すのは，作者も乳母か，それに近い立場の者であったことを思わせる（第六章）。

『紫式部日記』の敦成親王誕生記事を直接の資料として用いた初花巻について，二つの本文の比較をし，そのとり込み方の考察を通して，他の部分における女房日記の痕跡を知る手がかりとする。史実の誤りは依拠した資料の性格にもよっており，「見ず」「見えず」とする具体性をもったことばは，女房日記の引用であることを証している。『栄花物語』の作者が新たに加えたり訂正した記述は，確かな史料による補訂ではなく，見聞の記憶による点が多いようである（第七章）。アーサ・セルボーによる作者が異なる作品の分析方法を，続編十帖の構成と成立論に応用する。文体・物語・思想の三方向により，最近提唱される巻三十六と巻三十七との間で切るのではなく，むしろ続編を前半の七帖と後の三帖とに分けるほうが妥当である（第八章）。

後朱雀帝が譲位して後三条帝が即位する，摂関政治の転機ともなった事件を『栄花物語』と『今鏡』とで描写するが，二作品の政治に対する記述態度の違いから，それぞれの歴史物語としての性格を明らかにする。新時代の端緒を歴史的な事件として『今鏡』は回顧するのに対して，『栄花物語』は事件そのものの歴史的な意味合いよりも，崩御する父帝の皇子を思う情愛の一面として描くにすぎない。両書の違いは歴史の受け取り方の違いであり，虚構を語っているわけではない（第九章）。

第Ⅱ編は『大鏡』を取り上げ，そこに語られる道長を中心とする説話の性格，兼通伝の周辺，歴史意識，政治思想等を考察する。作品を支える根本の要素ともなっている伝聞性の強い説話（裏話）は，道長の栄花の究明に結びついた性格を持ち，そこから導き出される作者の思念は，道長の気概と歴史の状況，それと前世から定まっていた幸運とであったとする。それと，愚かで弱く悲しい人間の姿を共感をもって眺める挿話の存在は，歴史物語を語る姿勢に由来するのではなく，作者の人間そのものに対する興趣によるところが大きい（第一章）。兼通・兼家兄弟の争いについて，虚構をまじえながらも兼通の異例な関白就任を正当化していく歴史的な意義と，作者の政治的な人間を好む歴史叙述の方法とを考察する（第二章）。『大鏡』は，道長の栄花を語りながらも，ひたすら讃仰するのではなく，あくまでも栄花の究明という点に作者の執筆姿勢がある。その歴史意識のもとに，藤原氏の氏族としての権勢の実現に向かった歴史を語り，道長の強固な意志力と強運のあった背景を摘出する（第三章）。

第Ⅲ編は『今鏡』で，ここでは鏡物としての位置づけ，成立の年時，作者の周辺，政治意識，芸能の思想，収載される数多くの和歌等を取り上げる。『大鏡』を継承しながらも独自の方法で歴史を語る『今鏡』を述べ（第一章），成立について諸説を検討し，近年の説を排して旧来の嘉応二年春説の立場を支持する（第二章）。今日主流となっている寂超作者説を確認し，そこに登場する人物は政治とかかわる皇室と摂関藤原氏，源氏などであるが，それ以外としては系譜的に寂超の家である為忠一族が，白河院の近臣として登場するのは注目される。また，和歌・芸能にかかわる人物が描かれており，これは隠棲した歌学者である作者の関心による（第三章）。

『今鏡』の本質は政治的な意識にはなく，芸文韻事，風流閑雅への関心が中核となっているとされる。しかし，200首ほど収められる和歌や芸能の記述は，いずれも天皇の誕生・即位・崩御，それに摂関家の栄花など，諸々の政治にかかわることがらに対する賛美であり，哀傷・交友として用いられた処世の歌であり，その面からの評価となっているだけに，本質的には政治が語られているとすべきである（第五章）。『今鏡』は，『金葉集』とその撰者である俊頼の新風和歌に対する批判の書とされるが，むしろ反詞花集的態度であり，旧風になずむ態度への反論である（第六章）。

第Ⅳ編の『水鏡』は，その記述は全面的といってよいほど『扶桑略記』に依拠しており，そこから何が独自性なのか，時代の思想性，異本の問題に言及していく。『扶桑略記』は『日本紀略』『日本書紀』『続日本紀』を用いての編集だが，『水鏡』はその編集された『扶桑略記』を典拠としており，作品としての主体性が疑われかねない。そういった中にあって『水鏡』の独自性は，仏教関係記事を重視し，逸話・挿話等へ関心を示した取捨選択にあるといえよう（第一章）。不安と混乱の世相を描き，仏道の救済を模索する諸相が語られる一方では，古代への格別な関心を示す。これは混沌とする現世の規範を古代に求めようとしたからで，ここに作者の態度と思想を知ることができる（第二章）。巻末に付された藤原百川伝は，内容から現存しな『百川伝』に依拠したようで，悪辣な人間像をあますところなく描出する一方では，桓武皇統の出現にかけた功臣の姿として称揚するのは，藤原氏末流でもある作者の百川救済への代弁であり，また大義のためには一身をも投げ捨てる為政者の出現を待望しての主張でもあった（第三章）。『水鏡』は簡略な流布本から顕著に増補された異本とが存するが，両者の関係を述べるとともに，手の加えられた異本が文学作品としてはむしろ拙劣になった点を考証する（第四章）。

第Ⅴ編の『増鏡』は，後鳥羽・後醍醐天皇の倒幕運動が「王朝文化復興の壮挙」（日本古典文学大系『増鏡』解題）と解釈されるように，作品を統一する思想は公家文化への回帰とされるものの，歴史物語を共通して貫くのは強い政治性であることからすると，この作品にもそれが見られるとする立場からの論となっている。『増鏡』は鳥羽天皇から起筆し，後醍醐天皇の隠岐からの還幸で擱筆しており，ともに討幕に立った二人を首尾に配するだけでも，すでに政治的な性格を持っている。しかし，武家勢力への批判はなく，むしろ武門を称賛し，また後鳥羽・後醍醐にしても政治的な性格よりも，貴族的文化的な帝王としての描写となっている。このことは，文武の協調によって築かれる安寧と繁栄とを祈念しての書であり，その理想的な姿を，後嵯峨院時代の繁栄を描くことによって示したのである。

論文審査の結果の要旨

「歴史物語」という文学ジャンルのことばが用いられるようになったのは大正年間の半ばになってであり，研究もそれ以降進められてきたとはいえ，同じ平安朝文学の源氏物語などに比すと，研究者人口やその成果は微々たるものと言わざるを得ない。近年若い層に関心が持たれているとはいえ，物語関係の関心の高さとはくらべものにならないのが現状ではあるが，そういった中にあって，筆者は今日の歴史物語研究を支えた一人としてすでに学界では評価が定まっている感がある。本論文にいたるまでに，筆者は『平安女流作家の心象』（和泉書院）『源氏物語の研究』（望稜舎）を上梓し，資料としては『日本古代文学地名索引』（私家版），共編に『平安京の邸第』（望稜舎）『日本古代文学人名索引』（全４冊，望稜舎）があるなど，広い立場からの研究を精力的に続けてきた。このような平安朝文学への追究や，古代史に関する資料の整理という経過を経た延長線上に，このたびの学位申請論文『歴史物語の思想』が存するといってもよいであろう。

本論文には，表題の「思想」はもちろんのこと，「性格」「物語認識」「歴史意識」「歴史記述の態度」といったことばが基底として用いられ，それぞれの意味にやや不明確な点がありはするが，それらに共通する視点から筆者は歴史物語を明らかにしていこうとする方法をとる。歴史書でもなく，また物語でもない，いわば両義的な内容を持つ＜歴史物語＞として括られる作品は，何を書こうとしたのか，歴史的叙述を通じて作者の表現しようとしたものは何か，筆者はそれを＜思想＞ということばを用いて解明していこうとする。歴史上の事件や人物を素材として物語を書くこと，それは源氏物語によって開拓された新しい物語の方法だったが，その影響下に歴史物語の発生があり，必然的に人間の営みや運命への関心が創作への発露となったとする。

歴史物語は，その名が示すようにとかく歴史書としての扱いに傾きがちで，歴史の専門家は歴史事実からの詳細な当否を解明したり，国文学の立場からも記録との照合によって記述の誤りを指摘し，成立論や作者の想定などに精力を注いできた。記録には存しない歴史物語の叙述を，作品の性格をあまり考慮に入れず，とかく歴史事実を語る資料として用いるのが一般的であったし，確かにそういった一面を有することも否定できない。しかし，あくまでも歴史

を装った物語として読むべきだとするのが筆者の主張であり，その立場から歴史物語の方法ないし思想を解読していったのである。もちろん，これは筆者だけの見解ではなく，今日ではなかば常識化した歴史物語観ではあるが，そのような見方を推進した一人であることは確かである。

『栄花物語』正編三十帖の記事内容を，薨去関係記事・仏事関係記事・結婚関係記事・官位関係記事・誕生関係記事などと分類し，総行数でのそれぞれの占める割合を数値で示していく。微妙にからみあう記事など，行数では割り切れないことも多く，やや図式化したきらいもないわけではないが，作品のおおよその傾向はつかめるであろう。それによって，いわば政治的な事件からは離れた，誕生・元服・結婚などの人事的関心に目が向けられた，きわめて女性的関心の濃い作品であり，女性のために書かれた物語であるという性格を抽出してくる。関係記事が多く，詳細に記述されることが，即ち史実も微細になって正確な叙述に結びつくというわけではなく，歴史的事実よりも，むしろそれをめぐるさまざまな場面や心情が詳細に語られるのである。結婚や誕生関係にしても，その前後の人々にこまやかな情愛のさま，御産前の期待と不安，誕生の喜び，産養，五十日，百日の祝の描写に大半がさかれる。この物語認識の方法は，『源氏物語』という作品の出現により，それを継承してはじめて可能であったと論じていく。筆者にはすでに『源氏物語の研究』という著書があり，『源氏物語』への造詣も深いだけに，蛍巻における物語論の詳細な読みと『栄花物語』の成立とを結びつけた興味ある考察ではあるが，「事件と人物」という素材を『源氏物語』の物語方法で書き上げると歴史物語が出現するのかといった，疑念も生じないわけではない。それでは『栄花物語』はなぜ歴史にこだわったのか，物語の方法を虚構の『源氏物語』から継承したとするだけでよいのか，そのあたりをさらに追究してほしいという思いはする。

『栄花物語』が眼前の絶対的権勢をありのままに写していったのに対して，『大鏡』の作者は絶対的権勢がどのようにして招来されたか，またどのようにして現実になり得たか，両作品における作者の歴史認識の違いを見る。『栄花物語』と『大鏡』について，前者は道長への賛美，後者は批判的とする旧来の考え方を排し，いずれも道長の栄花の語りの書であるとする。さらに，道長の栄花は彼の類稀な稟質によるとする認識ではなく，藤原氏族が権勢を追い求めた結果であり，さらに道長には意志力と強い運があったとする。このほか，道長の肝だめしや弓矢をめぐっての説話の意義，兄兼通との確執など，考証や論理は明快で，説得力に富む内容となっている。さらに，『今鏡』『水鏡』『増鏡』などについても，筆者の主張する歴史思想の観点から分析考察し，従来の歴史物語研究にはなかった新鮮な切り口と，随所になされる提言に賛同できる点も多い。

ただ，全体のバランスとして，『栄花物語』は九章からなるのに対して，後半の『水鏡』は四章，『増鏡』にいたってはわずかに一章で終るなど，偏りが見られる。また，『栄花物語』の記事内容の分類にはややあらさがあり，続編の考察にアーサー・セルボーの理論を持ってくるなど，新しい試みの成果の当否は議論の残るところであろう。『今鏡』についても，畠山本と流布本との扱いにやや不満が残り，そこに見られる歌や芸能の記事についても，たんに政治の才能の具としてすませることができるのか，取り上げられた意義をさらに探ってもほしかった。

もっとも，このような点は本論文全体の本質的な意義を低めるものではない。個々の歴史物語の研究は深まりつつあるものの，その統一する思想としての物語の方法を考察した論として，学界に大きな影響をおよぼすはずである。本審査委員会は，本論文を博士（文学）の学位を授与するに充分な価値を有するものと認定する次第である。